

2024. 12. 22 (日) ルカ2：1～20

- 2:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。
- 2:2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。
- 2:3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。
- 2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
- 2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。
- 2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、
- 2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。
- 2:8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。
- 2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
- 2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。
- 2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
- 2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」
- 2:13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。
- 2:14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」
- 2:15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」
- 2:16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。
- 2:17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。
- 2:18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。
- 2:19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
- 2:20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

<説教>

本日 12 月 22 日の主日（日曜）礼拝は 2024 年のクリスマス礼拝です。クリスマスは、神のひとり子であり、すなわち神であるお方、イエス・キリストが、私たち人間を罪から救うために、私たちと同じ人となってこの世に生まれ、天から地上に来てくださったことを記念し、祝うときです。いや、ただ記念するだけでなく、キリストを、神を礼拝するときです。そもそもクリスマスとは「キリスト」と「ミサ」が合わさってできた言葉です。

「ミサ」は今で言えば、カトリック教会での礼拝のことです。「キリスト・ミサ」即ちクリスマスとはキリスト礼拝という意味です。だから、キリストの誕生を記念し、祝うのはいいですが、それが単なるこの日限りの「お誕生日祝い」や「記念日」で終わってしまっただけでは、余りにももったいなく、イエス・キリストに対し、神に対して申し訳ないことです。私たちが罪から救うために人となってこの世に来てくださったイエス・キリストに感謝し、キリストを自分の罪からの救い主として心で受け入れて、信じ、告白し、礼拝する。また、ひとり子イエスを私たちのためにこの世に送ってくださった〈神をあがめ、賛美〉する(ルカ 2:20)。それが本当のクリスマスです。

さて、そのように、神のひとり子イエス・キリストが人となって私たちの救い主として天からこの地上に生まれ、来てくださったときの様子が本日の聖書(ルカ 2:1-20)に記されています。私たちもそうですが、イエスも人としては、地上の現実の歴史上の、特定の時代に、特定の時に、特定の場所で、特定の人(母)を通して、特定の環境の下にお生まれになりました。そんな現実の世界は、いわば神を神とも思わず、人を人とも思わない、人の罪で満ちた世界でした。そこにイエスが人として来られたのは、偶然ではなく、神のご計画、御意思によってなされたことでした。そのことが1-7節を見ると分かります。

今から約二千二十数年～三十年ほど前、〈アウグストゥス〉がローマ帝国皇帝だった時代、今はパレスチナの地にある〈ユダヤのベツレヘム〉で、ヨセフの〈いいなずけの妻マリア〉からイエスはお生まれになりました。〈皇帝アウグストゥス〉が〈全世界の住民登録をせよという勅令〉を出しました。この〈住民登録〉は住民から税金を取り立てるためのもので、また徴兵のためとも考えられています。すべては絶対的支配者である皇帝の都合によることでした。その命令には誰も逆らうことはできませんでした。皇帝の支配下にあった〈人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行〉かなければなりません。〈ガリラヤの町ナザレ〉に住んでいたヨセフと〈身重になっていた〉マリアにも一切容赦はありませんでした。彼らも皇帝の命令によって〈登録するため〉だけに、約130kmも南にある、ヨセフの先祖ダビデの生まれた地ベツレヘムまで大変な思いをしてわざわざ旅をしなければなりません。権力闘争に明け暮れる支配者の都合で、ヨセフとマリアのような貧しい庶民にまで容赦なく税金が課されました。今も昔も変わらない、まさに人の世の酷く、罪深い現実です。そんな地上の人の現実の中に、神のひとり子、神であるイエス・キリストが人としてお生まれになったのです。

〈ところが〉(と著者のルカは言います)、〈彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ〉(6-7a)。ベツレヘムに着いて何日か経ったのでしょうが、住民登録のことにはルカはもう触れません。彼が記したのは、まずベツレヘムでマリアが〈男子の初子〉すなわち、イエスを産んだということです。ここでルカは直接には記していませんが、キリストがベツレヘムで生まれるということは、既にその時代から700年以上も前に預言者ミカを通して神が予告しておられたことでした(ミカ 5:2)。もしアウグストゥスの命令がなければ、ヨセフと身重のマリアがわざわざナザレからベツレヘムに行くことは決してなかったでしょう。それで分かることは、神がご自分のご計画を実現するために、いわば地上で敵無しの最高権力者〈皇帝アウグストゥス〉をもお使いになったということです。それが天地万物の創造者、支配者なる神の本当の権力というものです。

さて人としてお生まれになったイエスの置かれた現実も酷いものでした(7)。赤子のイ

イエスがくるまれた〈布〉はゴツゴツした荒布でした。寝かされたのは家畜の餌入れである〈飼葉桶〉でした。それは一説には石とか岩をくり抜いてできた、堅くて冷たい物と言われます。生まれた場所も家畜とその糞尿などで汚く臭い家畜小屋ということになります。

〈宿屋には彼らのいる場所がなかったから〉でした。誰も好き好んで生まれたばかりの赤ん坊を荒布にくるんで飼葉桶に寝かせたいという親はいないでしょう。なんとか事情を説明して〈宿屋〉に入れてもらおうとしたのではないのでしょうか。それなりのお金を出せば〈宿屋〉に入れてもらえたかもしれませんが、ヨセフとマリアにはそんなお金はなかったのでしょうか。それで、親子共々もやは人間扱いされず、家畜同然にあしらわれました。それもまた現代にも見られる人間の世界の罪深く、汚い現実です。そんな私たちの現実の世界に、イエスは普通の、いやそれ以上に貧しい人として生まれて来てくださったのです。

しかし、人々はそんなイエスに全く気が付きません。誰も自分の家を〈宿屋〉としてイエスを迎え入れようとしません。むしろ蔑み、軽んじ、家畜小屋の飼葉桶の中に追いやります。これが人間社会の現実、神と人間の関係そのものの姿です。それは人間の方から神に対して仕掛けたことでした。即ち、最初の人アダムが悪魔に誘惑されて神に反逆して罪を犯しました。それ以来、この地上に生まれて来る人々はみな、生まれながらに皇帝アウグストゥスならぬ悪魔と自分の欲望に従って生きるようになりました。そうやって人は自分の罪の故に、自分の身に神の怒り、永遠の滅びを招いています。生まれながらのままでは、私たち人は天国ではなく、地獄に住民登録されている者です。

そうやって生涯神に敵対し、ついには罪の故に神の怒りを受けて惨めに滅びるべき私たち人を、神は見捨てず、滅びから救おうとご計画なさいました。そのご計画が、神のひとり子、神であるイエスを人としてこの地上に生まれさせ、全く罪無き人生を送らせることでした。アダムとその子孫である私たちとは違い、罪を一つも犯さない人であるためには、神が人となるほかにありませんでした。そうやって罪無き人生を送られたイエスに、私たちの罪を負わせ、イエスを私たちのために、私たちの代わりに、十字架で死なせて神の怒りをイエスの上に下そうとされました。しかもそのイエスを後によみがえらせ、そのイエスを信じる者をイエスに免じて「神の子」として受け入れてくださる。それが神のご計画でした。ご自身の他には罪を犯さない人が一人もない現実の中で、事実イエスは人として生涯罪を一つも犯さず、神のご計画に従い、十字架の死に至るまで神に従い通されました。

そんなイエスの人としての地上での始まりが、家畜小屋で生まれ、飼葉桶に寝かせられるという惨めな姿でした。それはイエスのへりくだりです。そしてそれはいわば罪に汚れ、まみれ、腐臭を放ち、また堅く冷え切っている私たち人の世界にイエスがわざわざ入って来てくださったことを表してもいると思います。そのようにして、神でありつつ、人となられたイエスが私たちの現実の数限りない罪からの唯一の救い主なのです。

(8節以降については、午後の祝会、そして24日の燭火礼拝で説教します)